

名 誉 博 士 候 補 者 調 書

フリガナ ラデン・ムハマド・ハッサン・ラハヤ
氏 名 Raden Muhammad Hasan Rahaya

業 績

ラデン・ムハマド・ハッサン・ラハヤ氏は、1944年に当時の国費留学生制度であった南方特別留学生として来日し、1945年4月に広島大学の前身校である広島文理科大学に入学した。しかしながら、勉学半ばして同年8月6日に広島市内で被爆。奇跡的に難を逃れ、被爆に苦しむ広島市民の救助に尽力した。当時、広島文理科大学で一緒に学んでいた南方特別留学生のニック・ユソフ氏とサイド・オマール氏は被爆死し、今も広島と京都で眠っている。後年、自らの被爆体験や広島での経験をインドネシア国内で伝え、平和活動の推進に大きく貢献した。

帰国後、同人は1956年に結成されたインドネシア・日本友好機関（LPID）の設立に関わった。同機関は、その後インドネシア・日本友好協会（PPIJ）と名称変更し、ジャカルタ、バンドン、ジョクジャカルタに日本文化学院（NBG）を設立し、日本語や日本文化の教育と普及に取り組んだ。

1970年からインドネシア国会議員 Jamaluddin Malik 氏の私設顧問を務め、1976年に国会議長及び最高諮問会議議長 Idham Chalid 氏の私設顧問、1977年に国民協議会議員、1982年にインドネシア最高諮問会議委員などを歴任し、政治の場でも同国の発展と日本とインドネシアの友好関係の進展に貢献した。

1986年に日本留学経験者を中心にダルマ・プルサダ大学（UNSADA）が設立され、同人はその創設にも深く関わった。同大学は、1963年にインドネシアの日本留学経験者を中心に設立された日本留学同窓会 PRESADA とインドネシア・日本友好協会（PPIJ）を中心に、その活動に賛同する者、インドネシア政府、市民の協力を得て設立されたものであり、現在でも同大学は、インドネシア人学生の人材育成の場であると同時に日本的な価値観を普及する場としても機能しており、日本人や日本政府からも、インドネシアと日本との深い友好関係を示す財産として注目されている。2005年には同人の功績が認められ、日本政府より旭日中綬章の叙勲を受ける。

以上のように、同人は日本とインドネシアの友好関係の強化に努めるとともに同国での高等教育の発展にも多大に貢献した。また、被爆直後も広島市民の救助に尽力するとともに、帰国後も自らの被爆体験や本学での経験をインドネシア国内で伝え、本学の基本理念の一つである「平和を希求する精神」の実現に大きく貢献しており、本学の教育・研究並びに国際交流の推進に寄与した功績は極めて顕著であり、本学の名誉博士号の称号を授与すべき候補者として推薦するものである。